クセン石—ポリクレーヌ石系鉱物その他を産する。

この鉱物最初の発見者である飯盛、吉村、畑の三博士に敬意を表するとともに再発見につくされ、かつ試料を提供せられた伊藤尙氏ならびに水晶山の試料を恵与せられた長島乙吉氏に厚く御礼を申上げる。

23. 福島県房又、栃本、塩沢産 センウラン鉱

Uraninite from Fusamata, Tochimoto and Shiozawa,
Fukushima Prefecture

長 島 乙 吉 (Otokichi Nagashima)

櫻 井 欽 一 (Kin-ichi Sakurai)

加 藤 昭 (Akira Kato)

阿武隈地方のペグマタイト中、宮城県伊具郡丸森町(旧大張村)川張¹⁾、福島県伊達郡川俣町(旧飯坂村)関ノ上²⁾、田村郡西田村(旧逢隈村)三町目³⁾などからセンウラン鉱を産することはすでに知られているが、筆者らはさらに福島県伊達郡川俣町房又、田村郡田村町栃本(雲水峰^{ウズミネ}北方)、石川郡石川町塩沢(黒江鉱山)などのペグマタイト中からセンウラン鉱が産出することを知つたので次に報告する。

房又は関ノ上の北方でフェルグソン石、ガドリ石、イットリヤ石、カッレン石その他の希元素鉱物を産する。センウラン鉱は主としてフェルグソン石中に微細な粒をなして包有せられており、肉眼ではみとめがたいが、フェルグソン石を多くふくむ部をパンニングすることによつて同鉱の黒色の微粒を集めることができる。センウラン鉱のこの産状はまづたく関ノ上と同じである。

ノレルコをもちいてしらべたところ $d(\text{\AA})$ 3.12 (強), 2.71 (中), 1.915 (中), 1.635 (弱) のピークをみとめた。試料があまりにも少量であるため精度を欠いているのは遺憾であるが、このピークの位置とつよさによつて本鉱

1) 畑晋, 飯盛武夫: Bull. Inst. P. C. Res., 17, 358 (1938).

2) 飯盛武夫: Sci. Pap. I. P. C. R., 39, 209 (1942).

3) 畑晋, 飯盛武夫: Bull. Inst. P. C. Res., 17, 358 (1938).

がセンウラン鉱であることは明らかである。

柧本は雲水峰の北方にあつて、サマルスキー石^{*}、ユークセン石、リンカイウラン石、リンドウウラン石、ベータウラノフェンおよび一、二の未決定鉱物を産する。センウラン鉱はシャチョウ石とクロウンモの境附近にユークセン石、リンカイウラン石などと密接に共出している。径 0.1~1 mm ほどの黒色の粒であるが、時に $o\{111\}$ を主とし、これに $a\{100\}$ の加わつた美しい結晶（第3図）がみとめられる^{**}。これも産量が少いため精密な実験を行つておらないが、硝酸で溶けること、放射能が異常に高いこと、等軸晶系の結晶をなしていること、産状等よりしてセンウラン鉱であると考えて差支えないと思う。

第3図 柧本産センウラン鉱

塩沢の黒江鉱山はもと粕谷鉱山と称し、いわゆる石川地方の北部に位する大きなペグマタイト脈を採掘している。2,3 年前より大きなモナズ石、ゼノタイム、ジルコンをはじめ長さ 8 cm の余に達するサマルスキー石⁶⁾を産し、また昨年ごろよりリンカイウラン石、リンドウウラン石などを産しはじめた。センウラン鉱はシャチョウ石中にあつて、これとクロウンモ（テツウンモ）との境近くにザクロ石、リンカイウラン石などと共出している。径 1~2 mm ほどの $a\{100\}$ の結晶^{***}で、その外観産状は前記柧本のものにきわめて類似し、ただ結晶形を異にしているのみである。

この柧本、塩沢のものはなお試料蒐集中であり、今後相当の量を得て精密な研究を行いたいと思つている。

なお阿武隈地方のセンウラン鉱の産状には二種の型がある。すなわち一はフェルグソン石に伴うもので、その中に包有されること多く（川張、房又、関ノ上）、他はリンカイウラン石、リンドウウラン石に伴うもので、多くはその密集する部の中央に存する（三丁目、柧本、塩沢）。しかしいずれもシャチョウ石中にうまつており、これとクロウンモ（テツウンモを含む）の境附近に見出されることが多い。

種々御協力頂いた今吉隆治氏に感謝する。

* 結晶形よりして決定。 ** 測角データは省略した。

*** 測角のデータは省略した。

6) 大森、長谷川、横山：岩礦，40，1（1956）。